

	[26]
氏 名	さいとう ななこ 西藤 奈菜子
博士の専攻分野の名称	博士（心理学）
学位記番号	心博第35号
学位授与の日付	2020年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	自閉スペクトラム症のアセスメント —診断閾下のASDを対象としたスクリーニング 尺度の開発—
論文審査委員	主査教授 寺嶋 繁典 副査教授 関口 理久子 副査教授 中田 行重

## 論文内容の要旨

法制度等の拡充に伴う発達障害への支援が進展するなかで、近年、発達障害の診断基準を満たしにくい青年や成人の自閉スペクトラム症（以下、診断閾下 ASD と記述）への有用な支援のあり方が注目されている。診断閾下 ASD の特徴は、コミュニケーション上の様々な課題や、興味・関心の偏り、こだわりなどの ASD 特性が幼少期に目立たず、青年期や成人期における対人関係の拡大とともに、これらの特性を背景にした社会適応上の課題を生じることである。職場や教育機関などでは、当事者の訴えや不適応の背景にある ASD 特性に気づきにくく、早期の支援につながりにくいことが指摘されている。

このような現状のもとで、支援の現場では診断閾下 ASD の有用な鑑別手段の開発が喫緊の課題となっている。一連の研究は、このような現状を踏まえて、青年や成人の診断閾下 ASD を対象にしたアセスメントツールの開発を目的に行われたものである。論文の前半では、国内外の文献や先行研究の詳細なレビューを通じて診断閾下 ASD のアセスメントに関する課題を明らかにし、AQ、PARS、P-F スタディなどの既存の心理テストによる診断閾下 ASD のアセスメント精度の検証を行っている。また後半では、前半の研究結果を踏まえて、新たな ASD 特性評価尺度の開発、及び鑑別精度を高めるためのコミュニケーション状況評価尺度と社会適応評価尺度の開発が行われている。

診断閾下 ASD のスクリーニング精度の向上を目指す一連の研究は、診断閾下 ASD の行動特性に関する多面的な評価の試みであり、開発された手法は表面化しづらく見逃されやすい診断閾下 ASD のスクリーニングにおいて奏効することが期待される。各章の概要は以下のとおりである。

第1章では、丹念に収集された国内外の文献や先行研究の成果に基づいて、自閉症概念の

変遷やアセスメントに関する現状と課題を明らかにし、新たなスクリーニング尺度の必要性を示している。

第2章では、第1章の文献的論考をもとに、精神科外来を受診した診断閾下 ASD 群と非 ASD 臨床群に実施した日本版 AQ（自閉症スペクトラム指数）と PARS（親面接式自閉スペクトラム症評定尺度テキスト改訂版）の鑑別精度に関する実証的研究を行っている。この結果、PARS は診断閾下 ASD と他の精神疾患との鑑別に有用であったが、単独で来院することの多い青年や成人には使用できにくく、実用性に乏しいという課題が残された。一方の自記式質問紙である AQ は典型的な ASD 特性を想定した質問項目を中心に構成されていることや、診断閾下 ASD 群の中に自己理解の乏しい者が認められることから、鑑別には限界のあることが示唆された。以上の結果からみて、診断閾下 ASD 特性の測定に特化した質問紙の開発に加えて、コミュニケーションの様相など、多面的な行動の評価が鑑別精度の向上を促すことが示されている。

第3章では、先の二つの心理テストによる診断閾下 ASD の鑑別上の課題を受けて、コミュニケーションの様相を捉えやすく、また回答の意図的な操作ができにくい P-F スタディを用いた、診断閾下 ASD の鑑別可能性について検討している。診断閾下 ASD 群と非 ASD 臨床群の比較を通じて、診断閾下 ASD 群には、状況理解の困難さ、状況に不適切な応答や違和感のある語用といった特徴が P-F スタディに示された。このことから、本検査は自記式質問紙検査では把握しにくいコミュニケーションの様相や課題を捉えやすく、診断閾下 ASD の鑑別への有用性が示された。ただし、P-F スタディは実施時間が長く、検査者の臨床経験を要することなどから、心理職の配置されていない施設や教育の現場などでの実用性に限界があるとしている。

第4章では、既存の心理テストにおける診断閾下 ASD 鑑別に関する課題や限界を考慮し、時間的・人力的な制約の多い支援の現場で、簡便に使用できる診断閾下 ASD のスクリーニング尺度を考案している。DSM-5 や診断閾下 ASD に適用可能と考えられる海外の尺度を参考に、著者の診療上の経験等を勘案して作成した、ASD 特性を評価するための仮尺度を大学生に実施し、「杓子定規な行動様式」「状況察知力の弱さ」「消極的な対人交流」の3尺度から構成される ASD 特性評価尺度を新たに作成している。これら一連の研究から、大学生と診断閾下 ASD のカットオフ値を設定し、比較的軽微な ASD 特性の評価に有用であると結論づけている。ただし、本尺度による診断閾下 ASD 群と非 ASD 臨床群との鑑別は難しく、項目内容の質的な検討が必要であるとしている。

第5章では、診断閾下 ASD の鑑別精度をさらに高めるために、ASD 者本人も気づきにくいコミュニケーションの微妙な齟齬を評価する方法が必要であるとの見解から、コミュニケーション状況評価尺度の開発に関する一連の研究が示されている。本尺度は ASD 特性が顕在化しやすい場面での応答を評価するもので、場面ごとに相手に失礼な印象を与えたり、不快な感情を喚起させたり、戸惑わせたりする反応を項目化し、併せて各場面に適した常識的な応答も項目として加えている。本尺度の結果を診断閾下 ASD 群、非 ASD 臨床群、大学生群

で比較したところ、ASD 特性の高群は低群に比して、誤りを指摘されるような場面で謝罪の言葉を選択しない者が多いこと、また ASD 特性の高群は全場面合計得点が高く、ASD 特性を強く有している者ほど対人場面で齟齬を生じる応答をしやすいことが示されている。これらの結果から、本尺度は社会的場面で自己の課題を認識しにくい診断閾下 ASD の対人交流の評価に有用であるとしている。

第 6 章では、前章までの研究で示されてきた診断閾下 ASD の評価方法に加えて、彼らの社会適応度を評価する試みがなされている。ASD 特性は、個人の能力や環境によっては強みになることもあり、必ずしも ASD 特性の度合のみで適応度を判断するのは適切でないと言われてきた。診断閾下 ASD のアセスメントでは、ASD 特性の評価に加えて、社会的な適応状態を評価し、本人の意向を踏まえた上で支援の方法を検討する必要がある。本研究では、日常生活における支障の程度や個人の強みとなるリソースを幅広く測定するための社会適応評価尺度の開発を試みている。ASD の社会適応に関する先行研究等を参考に、ソーシャルサポートや自己効力感などを含む仮尺度を大学生に実施し、「安心感」「肯定感」「適応感」の 3 尺度を作成している。本尺度の診断閾下 ASD 群と大学生群との比較により、判別的妥当性に関しても良好な結果を得ており、ASD 特性評価尺度、コミュニケーション状況評価尺度と、新たに作成された社会適応評価尺度の併用により、診断閾下 ASD の鑑別から支援の方法に至る枠組みの構成において、重要な資料を提供する可能性が示されている。

第 7 章では、医療機関を受診した診断閾下 ASD の事例検討により、開発された ASD 特性評価尺度、コミュニケーション状況評価尺度、社会適応評価尺の臨床場面における有用性を検討している。この結果、ASD 特性の評価に加えて、コミュニケーションや社会適応の評価が、アセスメントの質の向上や、その後に続く支援のあり方の検討に有用であることを示している。

最後に一連の研究を総括し課題に言及している。まず調査対象とした診断閾下 ASD の数が少ないこと、及び比較対象者が大学生に限られている点である。青年や成人の診断閾下 ASD の来院者数自体が少ないものの、今後も継続して診断閾下 ASD のデータを収集し、比較対象者の年齢層や職業などの幅を広げた調査を行うとしている。二つ目は、ASD 特性を有していない、いくつかの精神疾患の患者を非 ASD 臨床群として比較した点をあげている。本来、精神疾患ごとの比較・検証を行う必要があり、診断閾下 ASD との鑑別が課題となっている統合失調症や強迫性障害、摂食障害などの患者のデータ収集に努め、各々の精神疾患との差異についても検討するとしている。三つ目の課題は、ASD 特性評価尺度の有用性をさらに検証するための、第三者評価との整合性に関する点である。青年や成人の診断閾下 ASD 者は単独受診が多く、養育者等への第三者評価の調査協力はかなり難しい状況にあるが、これらのデータも必要であるとしている。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、診断閾下 ASD のアセスメントに関する五つの研究から構成されている。冒頭で診断閾下 ASD のアセスメントの現状と課題を国内外の幅広い文献研究から明確にし、次いで既存のアセスメントツールの有用性と限界を実証的に示し、これらの研究結果に基づく診断閾下 ASD の新たなアセスメントの方法を考案したことは、発達障害への適切な支援が求められる現代社会において意義深い研究成果であると評価できる。ただし、尺度構成の方法及び、診断閾下 ASD 群と非 ASD 臨床群の対象者数が限られ、比較対象も大学生に限定されていることなどの課題が散見される。

しかし診断閾下 ASD のアセスメントにおいて、ASD 特性だけでなく、コミュニケーションや社会適応を併せた多面的な評価を提唱し、各々の評価尺度を考案したことは、学術・臨床実践の両面において画期的であり、発達障害の新たなアセスメントの試みとして大いに評価できる。開発された三つの尺度はさらなる検証の段階を経る必要があるが、今後、臨床や教育等の支援の現場で幅広く活用されることが期待される。

以下、本研究科が定める「博士論文審査基準（課程博士）」にしたがって、審査委員の見解を記述する。

### (1) 問題意識が明確で、課題設定が適切であること

近年 ASD 特性を背景に、青年や成人になってはじめて対人関係の課題が顕在化する症例が増えており、支援の現場では簡便かつ正確な鑑別のできる診断閾下 ASD のアセスメントツールの開発が喫緊の課題となっている。発達障害の支援に携わってきた著者は、診断閾下 ASD に特化したアセスメントツールの開発という目的のもとで五つの研究を行っており、問題意識が明確で社会的ニーズに合致した、きわめて適切な課題設定であると判断される。

### (2) 国内外の先行研究を適切に検討、吟味していること

本論文の巻末に示されたとおり、国内外の関連資料を多数、収集し、各所に適切に引用しながら論を展開している。本論文の冒頭に示されているとおり、一連の研究の開始にあたり、発達障害に関する先行研究や資料を幅広く収集して、診断閾下 ASD のアセスメントにおける課題を明らかにしている点は大いに評価できる。また公開口頭試問の質疑応答からみても、国内外の先行研究に関する知見を豊富に有していることは明らかである。

### (3) 研究目的に照らして研究・分析の方法が適切であること

研究全体として、研究課題・目的に合致した方法論を適切に適用している。第1章では関連する多数の先行研究の成果を示しつつ文献研究により、診断閾下 ASD のアセスメントにおける課題を明確にするという目的を達成している。実施された五つの研究では、いずれも調査によりデータを収集し、多変量解析やパラメトリック・ノンパラメトリック検定等の統計解析を駆使している。また作成した尺度の有用性を検討するために、事例研究の手法も取

り入れている。なお、尺度構成における因子数決定の過程、及び診断閾下 ASD 群、非 ASD 臨床群の少なさ、並びに大学生に限定した分析の進め方等に関し、今後の改善が期待される。

#### (4) 論文構成が的確で、論理展開に整合性、一貫性、説得力があること

本論文は全体的に学術論文として適切に構成され、論旨の一貫性や整合性も良好である。最初に研究課題・目的を明確にし、次に既存の心理テストによる診断閾下 ASD のアセスメントの有用性について検証し、これらの成果に基づく新たなアセスメントツールの考案、さらには開発された尺度の有効性を検証する事例研究を経て、本研究の総括と課題という構成で記述されている。診断閾下 ASD の新たなアセスメントツールの開発という目的を一貫して掲げ、段階的に研究を展開している点からみても、高い説得力を有すると判断される。

#### (5) 全体を通して社会的・学術的な独創性が認められること

一連の研究で、診断閾下 ASD の鑑別を主眼に ASD 特性評価尺度を構成したこと、及び ASD 特性、コミュニケーションの状況、社会適応の程度などの多面的な鑑別を提言したことは、これまでにない独創的な試みであり、学術的・臨床的にみて、きわめて意義深い成果であると評価できる。特に社会的場面をイメージさせながらコミュニケーション状況を評価する試みは、ASD 研究に新たな視点をもたらす可能性を示すものである。

これらの研究成果を直ちに普遍化して臨床現場等で本格的に応用するには、さらなる段階を経る必要があるが、診断閾下 ASD のアセスメントにおける一つの礎となることは確かである。また周囲の支援者の理解をより深めるとともに、社会全体での支援を一層、促すことに寄与するであろう。

#### (6) 国内外の学会や社会に対して貢献が認められること

AQ や PARS など日本での使用頻度の高い検査の診断閾下 ASD への適用可能性については、十分な検証が行われていない。また日本で使用されている ASD に関する評価尺度の多くは海外の翻訳版であり、我国の社会や文化を考慮したアセスメントツールの必要性が指摘されている。これらの点からみて、一連の研究の学術価値は高く、本論文に収録されている ASD 特性評価尺度の研究は、学術雑誌への掲載が決定している。

本論文を契機に、診断閾下 ASD を対象とした研究が増え、社会全体で ASD 特性とそれに伴う困難や課題、さらには ASD 特性の活かし方や強みへの理解が一層深まり、診断閾下 ASD 者の生きづらさの軽減につながることを期待される。なお、海外の学会等への貢献は未だ途上であり、国外への成果の発信が期待される場所である。

以上のとおり、本論文には今後の発展に期待される部分が認められるものの、心理学研究科博士論文審査基準に照らし、基準を十分に満たしていると判断される。したがって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。